

報告

2020年からの大学入試改革の課題

～英語4技能試験の導入の影響～

(2018年度関東支部大会 シンポジウムI 報告)

勝又 美智雄^A

モデレーター 勝又 美智雄 (学会理事、国際教養大学名誉教授)

パネリスト 太田 浩 (一橋大学国際教育センター教授)

奥山 則和 (桐蔭学園グローバル教育センター長)

村松 教子 (明治大学付属高校・中学英語科教諭)

安河内哲也 (財団法人・実用英語推進機構代表理事)



このシンポジウムは、この日の大学入試センター担当者による講演「大学入試での共通テスト導入の背景と現状」、および外部英語4技能試験について、その実施7団体の責任者に、それぞれの試験の特徴を解説してもらったのを受けて、高校・大学の現場教員たちがそれぞれ、2020年からの大学入試改革の動きをどうとらえているか、どんな展望を描いているかを議論してもらう場として設定した。

A: 国際教養大学名誉教授

当初はパネリストを高校教員2人、大学教員2人として準備し、予稿集でもその4人の人たちの討論した内容を紹介していたが、印南洋・中央大学理工学部教授が急病で欠席することになり、シンポジウム開催の直前、会場に聴衆として来ていた安河内さんに「ピンチヒッター」として登場してもらった。安河内さんは受験界では長く東進スクールの「カリスマ英語教師」として著名で、英語学習書もたくさん出していて、英語教育界での論客として知られている。予想通り、このシンポジウムでも興味ある発言、問題提起をたくさんして、議論に弾みをつけ、会場を沸かせた。

そこで改めて、その議論を総括すると――。

まず村松さんは、明治高校が2010年以降、明治大学への推薦基準が2015年度から英語検定2級合格およびTOEIC450点以上と大幅に厳しくなるのを受けて、高校全体で英語力をつける態勢づくりができたことを報告。現在既に毎年97%以上の生徒がこの推薦基準をクリアしていることを紹介して、同校が2020年度からの大学入試改革を「織り込み済みで、先取りしている」ことを報告した。具体的には英語力の向上に向けて英語科だけでなく国語科、理科、社会科、図書館・情報科などの協力も得て、校内英語スピーチコンテストや英語プレゼン・コンテスト、海外研修・国内研修の機会も設けて、4技能の向上に意欲的に取り組んでいるとのこと。そのため、今回の入試改革、4技能試験の導入は「いい方向への改革で、歓迎している」と積極的に評価した。

それに対し、奥山さんは、桐蔭学園が小学部の段階から英語検定を団体で受検していて、その蓄積データを教員・生徒・保護者が共有しながら大学までへの進路指導に生かしていることを紹介した上、2015年度から本格的に「アクティブラーニング型」授業を導入して、単に知識習得型の授業から、さまざまな課題について個人で考え、グループで協働しながら探求していく方式に替えて、英語科では特に4技能をバランスよく向上させる工夫を続けている、と紹介した。

桐蔭はかつては東大に毎年100人以上合格させた実績を持つ有名進学校だっただけに、一流大学への合格を望む保護者の期待も大きく、中学・高校部の受験体制も整っているが、今回の外部試験の導入の決定には、やや驚き、疑問点もいくつか感じた、と奥山さんは言う。その理由は外部の民間試験機関の英語の成績を提供するシステムでは試験の時期（2年の段階か3年のいつの時点か）に各機関で差がある上、その成績がどれだけ公平性・客観性が保障されているのか、また受験費用も概して高く、家計への負担が大きくなるのではないか、などの問題がある、と指摘した。

また太田さんは、まず大学生の英語力の低迷・劣化が彼らの国際競争力の低下を招いていることに警鐘を鳴らした。一橋大学の場合、入学時点でのTOEFLの成績がPBT(ペーパーベース・テスト)で平均520点と

日本の大学の中ではトップレベルにあるにも関わらず、在学中にそれがほとんど伸びないままで、特に男子はむしろ低下しているのが実態であり、彼らが留学しても議論や発表中心の授業になかなか適応できず、スピーキング力（日常会話もクラス討論などの議論）も他のアジアからの留学生たちに比べても大きく劣っていること、さらには大学生として必須の論文作成力、特に引用文献のこなし方などを高校段階までにはほとんど学んでいない実態が問題だ、と指摘した。

太田さんは今回の入試改革が大学現場に与える影響について、教員たちは自分の専門領域に専念していて、学生の英語力を高める工夫をしようという動きはほとんど期待できないのではないかと悲観的で、日本の大学の国際競争力を高めるためには、もっと積極的に学生を留学させる機会を増やすべきであり、それも単に半年以内の「短期留学」体験で良しとするのではなく、少なくとも半年以上留学させて、きちんと正規の単位を取得してくるよう促すべきだと主張した。

飛び入り参加した安河内さんは、中学・高校の教師たちは頑張っているが、学習指導要領に縛られ、自由な教え方が出来ずに悩んでいる、と同情する一方、塾・予備校は学校ができない「すき間」を狙ってビジネスにしている、それも学習指導要領など全く関係なく、生徒たちの知的好奇心を刺激して、できる子をどんどん伸ばす教育に徹しているからこそ生徒からも父兄からも信頼され、評判が良いのだ、と語った。

今回の入試改革もテスト業者や、そのテスト対策用の参考図書や教材の出版を当て込む出版社、テスト向けの特訓講習をする塾・予備校を喜ばせるだけに終わるのではないかと皮肉を言って、会場を笑わせた。

登壇者は4人ともきわめて率直な意見を述べてくれ、その交通整理をする私もとても楽しく、いろいろと学ばせてもらった。司会役と言っても壇上には座らず、会場側に立って、パネリストたちの顔を見ながらメモを取らずに頻りに質問を投げかけながら議論を進めた。そのため、以上に記したことはすべて私の記憶によるもので、多分に登壇者の発言を取り違えた心配もある。その点、登壇者、および本稿読者のご海容を願っておきたい。

受付日2018年6月18日、受理日2018年9月15日